

〈資料紹介〉 上山草人資料の現在

——ドキュメンタリー『ハリウッドを駆けた怪優』を起点として——

佐藤 未央子

はじめに

俳優上山草人の遺品資料を調査する過程で、一九九五年に放送されたドキュメンタリー番組『ハリウッドを駆けた怪優 異端の人・上山草人』(以下、『ハリウッドを駆けた怪優』と表記)の企画を立ち上げた加藤昌宏氏^①にお話を伺う機会を得た。加藤氏の談話を引用しながら、番組内容と制作の背景を紹介したうえ、草人資料がいまどのように保管・供覧されているかを報告する。

先に草人——上山(三田)貞^{あて}の来歴を確認しておく。一八八四年、宮城県涌谷町に生まれる。父は宮城医学校教授を務め、漢詩人でもあった上山五郎(静山)。仙台二中を経て上京し、五郎と知己だった犬養毅宅に寄宿して早稲田大学文科に通う。犬養家では長女の操と惹かれ合いながらも結ばれず、華族女学校で操の同窓だった

三田千枝子と接近し、婚入りする。演劇表現に活路を見出し、文芸協会演劇研究所に千枝子とともに入所。上山草人、浦路の名で舞台に上がりながら、芝区日蔭町(新橋)で化粧品店か、しやを営み始める。トラブルのため文芸協会を退会するものの、一九二二年に近代劇協会を立ち上げた。イブセンやシェイクスピア劇の意欲的な上演は一定の評価を得たが、衣川(角川)孔雀とのスキャンダルをはじめ、公演の失敗、借金苦といった窮地に陥る。一九一九年には浦路と渡米して地道に活動し、一九二三年にダグラス・フェアバンクス主演映画『バグダッドの盗賊』(ラオール・ウォルシュ、米一〇九二四年、日一〇九二五年)で、敵役にあたるモンゴルの王子役に抜擢される。ハリウッドで着実にキャリアを積み、一九二九年に帰国後は松竹に入社するも活躍はならず、晩年まで端役を配された。浦路は帰国せず、長男平八とともにアメリカに残り、草人は日本で

三〇歳ほどの年の離れた女性、直子を新たなパートナーとした。一九五四年、腸閉塞で死去。七〇年の波乱なる生涯だった。

生涯の盟友であった谷崎潤一郎は、その訃報記事の小ささや「故人の逸話を尋ねる」取材もなかった状況を振り返り「二十歳前後の女子供たちに聞いて見ると、上山草人の名さへ知らない者が多い。それでも映画雑誌には故人を偲ぶ記事が二つ三つ出てゐたさうだけれども、一般の新聞雑誌だつてもう少し草人のことを大きく扱つてやつてもよくはなかつた、らうか」と「世間の薄情を恨ん」だ（「上山草人のこと」、原題「老俳優の思ひ出——上山草人のこと」一九五四年一〇月）。約七〇年前の若者がすでに草人を知らないというのだから、現代にいたつてはなおさらだろう。「ハリウッドを駆けた怪優」を手掛けた加藤氏にも同様の思いがあった。「上山草人の名が地元ですら忘れ去られ、関係者も年々少なくなっている今、世界の映画の歴史にその才能によって名をとどめた先達の生涯を広く紹介し、映像記録として後世に語り継ぐことは地元テレビ局としての責務と考へ」た。経済成長の傍らで、「個人の個性は痩せ細り文化も芸術も日常の生活も影の薄い青ざめたものになって」いた。「そのような現代のなかに、上山草人という失なわれた異端の個性をもう一度引きずり出す」^②——九〇年代の停滞した社会に草人を召喚せんとしたのである。

〈資料紹介〉上山草人資料の現在

番組の構成

一. 「ハリウッドを駆けた怪優」をめぐる

本作品は、一九九四年に開局二〇周年を迎えるKHB東日本放送が公募した番組企画に採用されたものである。同年は草人没後四〇年でもあり、翌九五年は映画誕生一〇〇周年にあたる節目の年だった^③。制作にはドキュメンタリージャパンが協力し、監督に諏訪敦彦、主演に奥田瑛二を迎え、草人の人生を調査するドキュメンタリーとドラマパートを交錯させる演出が施されている。一九九五年一月五日にテレビ朝日系列二三局で放送された（カラー・七十二分）。

ドラマは新劇時代の草人から始まる。近代劇協会第二回興行（於帝国劇場、一九一三年三月）の演目、鷗外訳のゲーテ『ファウスト』上演に向けた稽古で浦路（名取裕子）に厳しく稽古をつける最中、幼少時代の自身を幻視し、自伝小説『蛇酒』（阿蘭陀書房、一九一七年一月）の記述をナレーションとして、幼少期に芝居に強く惹きつけられた原体験が演じられる。のち現代パートに移り、雑踏のなかで、孔雀を演じる柳愛里と奥田が出会う。ドラマへ戻り妻妾同居の日々が演じられ、二人の女性に与えられた芸名——角川／浦路、すなわち母にまつわるルーツを辿るべく、涌谷【図一】と仙台へ取材に向かう。草人の甥にあたる伊藤高古（宮城県南郷町在住、



【図1】 KHB 東日本放送提供

当時七四歳)によると、草人は小学校四年生の時に角川家から上山家に入ったとされ、当時の写真も紹介される。取材班は仙台市広瀬川に臨む上山家の敷地(青葉区国見)と南山閣を訪ね、奥田は再び、母と引き離された幼き草人を幻視する。

ダムにのし上がることはなかった。草人の個性が強すぎ、当時の映画界は良さを引き出せなかったと吉村公三郎^⑤は評した。草人と直子の長男、三田松五郎(当時六一歳)によれば、最晩年の草人は常に苦悩を思わせる顔つきをしていたが、死の間際に表情が消え、笑みを浮かべて亡くなっていったという。「修羅を生きた」^⑥異端の居場所が近代日本にはなかったことが批評され、番組は幕を閉じる。

客観的な草人の様子は谷崎

制作に至るまで

「上山草人のこと」によって確認され、浦路が谷崎(金守珍)の父の通夜を訪れて渡航資金の相談をする逸話も演じられた。渡米後の活動はアメリカでのロケを通して紹介され、草人著『素顔のハリウッド』(実業之日本社、一九三〇年七月)に基づき、モンゴルの王子役を勝ち取るまでの経緯が演じられる。淀川長治は、ここで草人が東洋のグロテスクや影——“Behind the shadow”と形容する

加藤氏が本企画を提案した理由は大きく分けて二つある。まずは南山閣が加藤氏の住まいの近隣にあり、幼少期に草人を身近に感じていたためだという。いわく「幼少のころから毎日配達や行商に来る牛乳屋さん、豆腐屋さん、そして母から「あの山にあるお屋敷は上山草人というハリウッドスターが出た家だ」ということを聞かされてい」た。このころはまだ地元とその名が伝わっていた様子が窺える。

——を見事に体現したと振り返った。さらにアメリカ時代の関係者や映画研究者の草人評が語られ、輝かしいハリウッド時代が偲ばれたのち、帰国した草人、アメリカに残った浦路と各々の道が辿られる。帰国後の草人は松竹蒲田で『愛よ人類と共にあれ』(日本・米国篇、島津保次郎、一九三一年)に主演したものの、日本のスター

その後しばらく草人から遠ざかったが、ある事件を契機に再び巡り合う。一九九三年、現職の宮城県知事と仙台市長が収賄罪の嫌疑で逮捕・起訴されるゼネコン汚職事件が起こり、報道部の筆頭デスクを務めていた加藤氏は「検察が連日十数か所で行っていた関係先の家宅捜索の取材手配に忙殺され」た。

日夜を問わずテレビ朝日の司法担当キャップと連絡を取り合い、毎日早朝に配置するカメラクルーを手配することの繰り返しで、半年にわたって休みなく出社し、睡眠時間も満足に取れずに疲弊していました。そんな折、家宅捜索対象者の自宅を確認するために住宅地図を開いていて「上山家」を見つけ、子どもの頃の記憶が蘇ったのです。

折しも東日本放送では、開局二〇周年を控えて社内から企画を募集していました。行政トップの汚職により宮城県・仙台市の名が地に堕ちていた時期でしたので、ハリウッドで羽ばたいた俳優の生涯を全国へ発信することで、地元が元気になるように。また、負のイメージを少しでも明るくものにしたいと考えたのです。映画誕生一〇〇年というのは後付けでした。

『ハリウッドを駈けた怪優』は、宮城からハリウッドに至る草人の足跡を奥田が調査・探訪するという大筋に沿いつつも、草人を演じる奥田自身の内面に迫るメタ的な演出が施された。加藤氏の言葉を借りれば「草人を俳優奥田瑛二がフィクションとして演じつつ、現実の関係者にインタビューしながらドキュメントとしてレポートするという多層的構成」を持つ。「一〇〇年も前の人物の生涯、しかも地元の仙台市民一〇〇〇人に聞いても九七人は上山草人を知らない

だろうという忘れ去られた人物をテレビ番組として描くには、ドキユメンタリーとドラマの手法を用いて描くしかない」と考えたためだという。独特の演出を手掛けた諏訪敦彦は当時「テレビ番組の手法を批判的にコラージュする」試みを行っており、加藤氏は「従来にはない番組」を制作するにふさわしい人物だと見込んだ。

奥田の妻、安藤和津は、草人らと交流が深い犬養健^⑦の娘である。奥田は市会議員の父を持つが、明治学院大学を中退して役者を志すも収入が厳しく、アルバイトを転々とするうちに和津と出会った。そして「物心両面からサポートを受けたことなどから役者への道が開け」という経歴が草人に通じたことも配役の決め手だった。

さて加藤氏は「ゼネコン汚職事件の捜査が一段落した一九九三年秋からANN系列報道デスク会議で上京するたびに国会図書館で草人に関わる書籍や新聞記事などを調べ」、遺族の三田竹三郎（草人と浦路の三男。当時七七歳）が徳島に、松五郎が東京に健在であることを知った。松五郎からは、高橋梅代（草人と直子の長女）が浅草に在住している情報を得た。一九九四年春に企画が採用され、報道部から制作部へ異動した加藤氏は調査を本格化させる。竹三郎を訪ねると「段ボール箱に入ったハリウッド時代の写真が大量に」あった^⑧。竹三郎はインタビューを通して、育ての親や兄弟と実父・実母との板挟みに悩んだ少年期を回顧した。草人の子息に関しては、

竹三郎の妻で絵本作家でもある三田照子の著書『ハリウッドの怪優 上山草人とその妻山川浦路』（日本図書刊行会、一九九六年十二月）に詳しい。

浦谷町の資料

その後、仙台の上山家への取材を通して伊藤高古をはじめとする親戚の消息を掴み、伊藤への聞き込みと、浦谷町芸術文化協会（浦谷町教育委員会内）などの協力により、浦谷町の上山家や上山五郎に関する情報を収集した。加藤氏によれば浦谷町芸術文化協会の機関誌『芸文わくや』が、一九八六年三月一五日号（第二二号）、七月一五日号（第一三三号）、一〇月二五日号（第一四号）の三回にわたって郷土史家の鈴木市郎による記事「浦谷生れの名優 上山草人」を連載した。当該号は図書館等に所蔵がなく、今回、浦谷町芸術文化協会のご厚意によって確認することができた。記事では浦谷町史編纂委員会編『浦谷町史』（下巻、一九六八年三月、五〇―五〇三頁^⑨）をもとに、五郎と貞のルーツが述べられる。五郎は浦谷町の鷺足家に生まれ、伊達安芸（浦谷伊達）家中であった上山家（南郷村木間塚）の養子となったのち、医師角川淡斎の邸宅、角川屋敷（浦谷町立丁）で開業。淡斎の娘浦路との間に貞をもうけたが、五郎には本妻がおり、浦路は精神を病み息子と引き離された。角川

屋敷の近くには浦谷第一小学校が建てられ、校庭の榎や松は角川屋敷のものだった旨を、草人のいところにあたる鷺足純（同校教員）から聞いたと鈴木は記している。帰国した草人が浦谷を訪れ、鷺足家で一九三〇年の正月を迎えた際の記念写真二葉も掲載されている^⑩。浦谷町教育会主催で歓迎会も催されたが、『バグダッドの盗賊』は仙台でしか上映されず、浦谷では『マンダレイへの道』（トッド・ブラウニング、米一九二六年、日一九二七年）が柳町の万栄館で上映された。ほか、五郎は上京して法律を学んだとする説に対し、慶應義塾で医学を修め、授与された卒業証書が『宮城県医師会史医療編』（一九七五年九月、一一五頁）に掲載されていることを指摘するなど、貴重な情報を提供している。

加藤氏によると角川浦路の精神的な問題については伊藤も証言した一方で、放送後に浦路の姪である角川きよ（神奈川県葉山町在住、当時八〇歳代）から「浦路は聡明な女性だったはずで発狂したというのは事実と異なるのではないか」という指摘があり、加藤氏は竹三郎をはじめとする諸氏に再度確認したものの「発狂説を覆す証拠」は見つからなかったという。

草人は近代劇協会の女優、なかでも親密な関係にある女性には母にまつわる芸名を冠した。妻の三田千枝子⇨上山（のち山川）浦路、愛人の牛田貞子⇨衣川孔雀である。当初、孔雀には角川姓を与える

予定だったが、浦路の強い反対にあい衣川に落ち着いた。「ハリウッドを駈けた怪優」ではその背景を踏まえ「角川孔雀」として紹介されている。

アメリカ取材を通して

諏訪監督をはじめとする「制作の実働部隊が稼働してからはアメリカでの調査も本格化」し、渡米後の草人・浦路の足跡も丹念に追跡した。以下、加藤氏の回顧を引用する。

事前調査のためロサンゼルスへ諏訪監督と私の二人で向かいました。リトルトーキョーのホテルに泊まり、日系新聞の羅府新報（同紙はまだ発刊を続けています）やハリウッドのキャステイングプロダクションに通い、当時のロサンゼルスの日系社会やハリウッドの撮影所の仕組みなどを調べ、ロケの内容を詰めていきました。ハリウッドにあるスターのプロマイド販売店に行き、「SOJIN KAMIYAMAのプロマイドはあるか？」と聞くと、一分もせずに草人の写真が出てきました。一〇〇年経っても名を残していることに畏敬の念を覚えずにはいられませんでした。

実際の現地撮影では新たに山崎裕カメラマンと奥田が加わった。取

（資料紹介） 上山草人資料の現在

材では、草人と浦路が滞在したロサンゼルス日本人街であるリトル・トーキョーを訪れ、羅府新報社【図2】で当時の草人の劇評——「入るは入るは三日共札止めの近代劇」（『羅府新報』一九一九年八月二二日）——を確認したり、旧ダグラス・フエアバンクスタジアス【図3】や、かつて草人・浦路が暮らした家を訪ねたりと、約七〇年前の痕跡を求める旅となった。現地の関係者として、草人と共演した女優ビリー・ダヴ（当時九一歳）を訪問。ダヴはアルバムをめくりながら草人は紳士だったと懐古する。奥田が、彼を奇妙な容貌だと思わなかったかと尋ねるとすぐ否定して

「他の悪役の人たちとは何か違



【図3】 KHB 東日本放送提供



【図2】 KHB 東日本放送提供



彼は1ページ全部使っていますね
いろんなメイクをしています

【図4】 KHB 東日本放送提供



アリゾナ州
ヒラー収容所跡

【図5】 KHB 東日本放送提供

うものをもって」おり、皆が彼の「悪役ぶり」を好んでいたが「あんなにいい役者だったのになぜ悪役しかやらなかったのか」と疑問を呈する。現地の映画研究者マイケル・ブレイクも、

四七本にわたる出演歴を証左として、確かに草人は高く評価されており、特にプロデューサーに気に入られていたと推察する。【図4】は当時キャストインクに使用されていた俳優名鑑である。

草人帰国後、アメリカに留まり平八へ愛情を注いだ浦路の様子については、友人だった竹田静（バサデイナ市在住、当時八〇歳）の証言を伝える。浦路は太平

洋戦争開戦後にアリゾナ州のヒラリバー強制収容所【図5】に収容された。取材班も同地を訪れている。

ヒラリバーはアリゾナ州の州都フェニックスからメキシコ方向へ車で南下すること一時間ほど。現在は先住民の居留地になっています。この日中の最高気温はなんと摂氏五〇度^①。人の背丈より高いサボテンが林立する周りを見渡すと、砂漠というよりは土漠というような荒れ地に竜巻が三か所から上がっていました。夏は酷暑、冬はマイナス二〇度前後まで気温が下がるといふ過酷な土地です。こんなところに四年間も収容されていた浦路は何を思っていたのでしょうか。収容所の建物は跡形もありませんが、建物跡と思われる砂地を手で掘ってみるとフォークやスプーン、化粧品ビン、櫛など生活の痕跡が次々と出てきて肅然とする思いでした。

収容所でも演劇活動をした浦路の様子は、工藤美代子「ハルワダ聖林のモングル王子——上山草人と浦路」〔潮〕一九八五年一〇月—一九八六年三月。挿画・黒川淳子）や、前掲の三田照子「ハリウッドの優 上山草人とその妻山川浦路」にまとめられている。

国内外での評価

本作品は一九九五年度第三回ギャラクシー賞で奨励賞を受賞した。国内外の映画祭でもたびたび招待上映されている。国内では二〇一〇年にせんだいメディアアテーク主催「スクリーンに描かれた街仙台」で上映され、アフタートークを記録したDVDもメディアアテークで閲覧・貸出を行っている。また仙台では二〇一四年に青葉の杜の映画祭でも上映されており、やはり郷土では注目度が高いことがわかる。二〇一八年にはノンフィクション作品の特集とコンペを軸とする、座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル（第九回）

特集「表現者たち」で「諏訪敦彦セレクション」として上映されている。諏訪監督が欧州で高く評価されていることから、二〇〇六年にマルセイユ国際映画祭、二〇一二年にラ・ロッシュシュシュルヨ国際映画祭に出品された。海外上映のためフランス語、スペイン語字幕も制作されたという。

視聴の機会は限られているが、草人の活動実態を知るためのみならず、奥田を依り代として、現実と虚構の狭間に生きる俳優の在り方を考察せしめる参照すべき作品だといえる。

二. 草人資料の現在

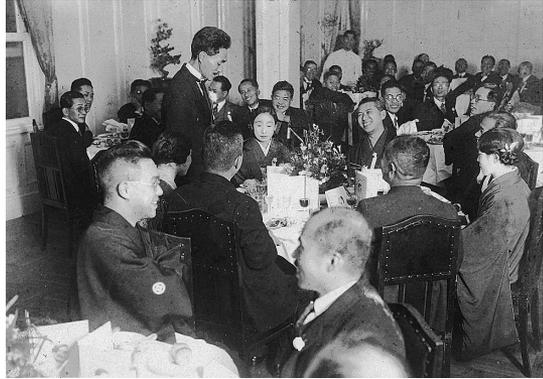
執筆活動にも精を出した草人には、小説「蛇酒」「煉獄」（一九一

八年六―七月）、エッセイ『素顔のハリウッド』等の著作がある。

「蛇酒」「煉獄」を合冊にした単行本『煉獄』（新潮社、一九一八年一〇月）は国会図書館デジタルコレクションでインターネット公開されており（ただし欠頁あり）、『素顔のハリウッド』はゆまに書房から復刻版（『最先端民衆娯楽映画文献資料集』第一三巻、二〇〇六年二月）が刊行されているため、いずれもアクセスしやすい。

評伝としては、前掲の工藤美代子「聖林のモンゴル王子」や三田照子『ハリウッドの怪優』があり、後者は草人の遺品である写真資料が充実している。ただし本書は所蔵する図書館が少ないうえ古書としても入手が難しい。最も情報の密度が高いのは細江光「上山草人年譜稿——谷崎潤一郎との交友を中心に」（『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』二〇〇二年三月―二〇〇五年三月、全五篇、二〇〇のみ『甲南国文』二〇〇二年三月）だろう。前掲の遺族への聞き取りや、本稿で紹介した『ハリウッドを駈けた怪優』も参照しながら関連する一次資料を精査したものであり、草人のみならず浦路や谷崎の動向にまで目配りされている。近年の研究としては、岸田真「忘れられた演劇人」（全三篇、『桜美林論考 人文研究』二〇一八年三月―二〇二〇年三月）も挙げられる。

草人の遺品や写真等の資料は主に、早稲田大学演劇博物館、公益財団法人川喜多記念映画文化財団に保管されている。演劇博物館で



【図6】写真協力：公益財団法人川喜多記念映画文化財団

上映と諏訪監督の講演を軸とする研究集会が催された。現在は早稲田大学文化資源データベース上で、草人に関連する資料の情報——上演記録や舞台写真、スチール、映像等——が提供されている。川喜多記念映画文化財団では、主に映画関係の写真資料を数百点保管し整理を進めており、このたび全容を確認することができた^⑭。写真の内容ごとに草人が遺族が分類したとみられる項目が立てられており、なかでも『帰朝歓迎写真／帰朝後の記念撮影／旅行コダツ

は、二〇一三年四月に開設された常設展示『映像』コーナーの「早稲田所縁の映画人」で草人を取り上げた。また同年、羽鳥隆英が代表する共同研究「上山草人資料を活用した日米露の比較映画史研究」が進められ、一月には「ハリウッドを駆けた怪優」の

ク写真等／帰朝後草人素顔等／帰朝後一切』『帰朝後／草人映画スチール／舞台写真』、『帰朝後／草人素顔』『帰朝当時歓迎写真』と、帰朝時の盛況や歓迎会・講演会の模様を写したものが多かった。『アメリカ時代／日本 芝居、活動／在米当時集れるものにして／貴重な写真もあり』のグループでは、各国の俳優・映画関係者、雑誌社、新聞社から寄贈されたであろうプロマイドが集められていた。写真ではないが、ジョン・バリモア夫妻から送られた手紙も丁寧に保管されていた。『日本の俳優監督等の写真／映画スチール等』では、草人會を主宰した友人であり監督の牛原虚彦や家族を写したものが、水谷八重子から贈られた写真が数多くみられた。ほか鈴木傳明や夏川静江ら、交流のあった人気俳優のサイン入りプロマイドや、撮影所で撮られた記念写真、正宗白鳥と撮影した写真等もみられた。宣材写真だと思われる『草人扮装写真／十枚一組』のセットも残されていた。

新劇時代からの付き合いになる谷崎潤一郎との親交を偲ばせる資料としては、谷崎の娘鮎子が主演した映画『舌切雀』（ヘンリー小谷、一九三三年）の雑誌記事切り抜きと、谷崎の写真四枚が挙げられる。まず【図6】は、草人が帰朝した一九二九年暮から翌年にかけて繰り返し催された歓迎会で撮影されたものである。【図7】は歓迎会に併せて出演作が上映された際の写真だとみられ、中央の席



【図7】写真協力：公益財団法人川喜多記念映画文化財団



【図8】写真協力：公益財団法人川喜多記念映画文化財団



【図9】写真協力：公益財団法人川喜多記念映画文化財団

で隣り合って上方を見つめる様子が写されている。

【図8】には大阪毎日新聞の印が押されている。草人は写っていないが、大阪毎日新聞主催歓迎会で撮られたものか。【図9】は宴席の記念写真だろう。¹⁶⁾

これらのほかに在米時の草人が撮影したと思われる風景写真やオフショット、日本で撮影されたか寄贈されたと思われる舞台写真・絵葉書等¹⁷⁾も多数混在しており、今後の整理が待たれる。

直近の newly 資料としては『文京区立森鷗外記念館所蔵 森鷗外宛書簡集4（かーこ）編』（二〇二一年一〇月）で翻刻・紹介された葉書三通¹⁸⁾がある。巡業先の熊本、台南、宇和島から投函されたもので、川下俊文による解説「上山草人と三枚の葉書」が掲載された（二七―三四頁）。また川下は二〇二二年一月に研究会「上山草人・近代劇協会の大正三年台湾巡業をめぐって」¹⁹⁾で、現地での足跡や劇評を詳らかにした。

草人資料は戦前文学史・演劇史・映画史の記録でもあり、そのクロスオーバーにおいて検証される必要がある。今後、さらなる調査と整理を進めたい。

おわりに

加藤氏は、草人最大の魅力を「異端」に見出す。

草人と浦路の活動は正統とは認められにくいもので、それがゆえに昭和初期の軍国主義の進展の中で歴史の中に埋もれてしまいがち。異端は何かしらの反感や嫌悪感を込めて使用されることが多い言葉ですが、全体主義の対極として、異端が存在し、その存在を認めることは健全な社会のためには必要なことです。とりわけ芸術や文学など創造性や、獨創性が評価される分野においてはなくてはならないものだと思います。

埋没した資料の調査・整理および情報発信は、その営為に再びスポットライトを当てることにつながるだろう。課題は多数の資料が各地に分散していることである。調査対象を群馬県太田市立新田図書館田中純一郎資料や国立映画アーカイブにも広げ、既出資料の情報と連携させていきたい。

注

- ① 現在、行政書士 仙台サンシャイン法務事務所代表。KH B 東日本放送制作部長、報道制作局長、執行役員、関連会社社長を歴任。金沢大学・東北学院大学非常勤講師、東北大学大学院特任教授も務めた。加藤氏への聞き取りは二〇二一年一月五日から一日にかけ、メールを通して行った。番組企画書やセールズシートもご提供いただき、参考資料とした。
- ② セールズシート『東日本放送開局20周年記念特別企画 ハリウッドを

〈資料紹介〉 上山草人資料の現在

駆けた怪優 仙台人・上山草人の生涯」より。

③ 加藤氏の番組企画書によると、一九九三年二月に永瀬義郎の木版画「ある日の草人」がフランスで発見され、草人に注目が集まったことも背景にある。

④ 江戸末期に仙台藩士の別荘として建てられ、明治に五郎が買い取った。文士のサロンを兼ねており、五郎と交流のあった落合直文や鮎貝槐園、土井晩翠をはじめ、与謝野鉄幹、正岡子規も訪れた（佐々久監修『仙台の散策——歴史と文学をたずねて』宝文堂出版販売、一九七四年八月、一七〇—一七七頁）。

⑤ 吉村監督作品では、大映映画『源氏物語』（一九五一年）に出演。監修を担当した谷崎の推薦で僧都役を演じた。

⑥ 青山霊園にある草人・浦路の墓碑より。

⑦ 学生時代や近代劇協会時代の草人・浦路の様子を伝えつつ、上山珊瑚を哀悼する小説「女優」（『中央公論』一九二八年六月—七月）を発表。拙稿「上山珊瑚の足跡——新劇／映画女優としての位置」（『同志社国文学』二〇二二年三月）で一部を紹介した。

⑧ この写真資料は現在、徳島のラジオキャスター梅津龍太郎氏が保管している。伊藤稔「戦前のハリウッド俳優 上山草人を知って」、『朝日新聞デジタル』二〇二一年一月一九日（<https://www.asahi.com/articles/ASP17JK2P1PPTL001Shmn>）参照。

⑨ 『浦谷町史』での記述は金沢規雄『近代文学と仙台——ある流れのなかに』（日曜随筆社、一九六五年六月—一九六六年六月）に基づくと付記されている。

⑩ 教員の鷲足頼子提供とある。

⑪ 「私（注—加藤氏）は汗だくでしたが、奥田さんは涼しい顔で汗ひとつかいていません。なぜ？」と聞くと、「俳優は汗をかいてはいけない

のだ！ 気合いだ!!」とのこと。しかし、撰氏五〇度はさすがに厳しく、後で聞いたところからうじて顔には汗をかかなかったものの、背中にスーッと一筋汗が流れていたとのこと。

⑫ 二〇一〇年六月一〇日。登壇者は諏訪監督と加藤氏で、当時の取材・制作状況を振り返った。アメリカにおいて草人のフィルムがほとんど保存されていなかった状況や、ダヴが映画の物語と現実を混同して記憶していたという逸話は興味深い。

⑬ 早稲田大学演劇映像学連携研究拠点、二〇一三年度公募研究「上山草人資料を活用した日米露の比較映画史研究 研究成果概要」<http://www.waseda.jp/~pri-kyodo-empaku/archive/activity/2013koboseika/2013koboseika07.html>

⑭ 細江年譜(五)には、松五郎・梅代の証言として、モンゴルの王子に扮した草人の肖像画(永瀬義郎の作品と思われる)や変装用の入れ歯も寄贈したとある(四七頁)が、現在調査中。

⑮ 一九三〇年一月九日付『大阪朝日新聞』九頁の記事(『厚い友情の中で死にたいものだ』きのふ大阪ホテルで盛んな草人歓迎会)に掲載された、松竹座主催歓迎会の写真と構図が類似していることから、別のショットとして撮られたものだと推測される。同図は『ハリウッドを駆けた怪優』でも紹介された。

⑯ 谷崎の談話「猫」(『大阪毎日新聞』一九三〇年一月二日、一〇頁)には、一〇日夜に大阪で飲んだとあるため、その際の写真か。

⑰ 一九二〇年の民衆座公演『青い鳥』(畑中蓼坡演出、水谷八重子、夏川静江出演)や、歌舞伎座一月狂言『勸進帳』、岡本綺堂作『雷火』等。

⑱ 一九一四年六月(推定)一五日、一月一日、一九一五年一月三日。

⑲ 科学研究費補助金(基盤研究(C))「日本統治下の台湾における歌舞

伎・浄瑠璃史の構築——現地資料に基づく基礎研究と考察」(研究代表者・中尾薫、二〇一八―二二年度) 主催。

〔付記〕加藤昌宏氏には快く取材にお答えいただいたのみならず、当時の資料のご提供や映像使用の許諾確認など、多岐にわたって便宜をお図りいただいた。心より厚く御礼申し上げます。また、映像をご提供くださったKH B東日本放送、ドキュメンタリージャパンの橋本佳子プロデューサー、資料調査にご協力くださった浦谷町教育委員会の達旨部義美氏、川喜多記念映画文化財団の和地由紀子氏にも深く感謝申し上げます。